痛風に対する関節超音波検査による経時的観察の有用性

佐々木竜子¹⁾ 大山 博司¹⁾ 諸見里 仁¹⁾
大山 恵子²⁾ 藤森 新³⁾

はじめに

関節超音波検査(US)は簡便性と非侵襲性に優れ、関節内尿酸塩結晶の沈着を評価することが可能である。痛風患者における経時的なUSの実施にて尿酸塩結晶の縮小を認めた3症例を報告する。

症例 1

47歳男性。10年来の痛風患者であり、両母趾などに発作を繰り返している。USを実施し、両母趾に尿酸塩結晶沈着を認めた。前回US実施から19ヶ月後に再度USを実施したところ、右母趾に認めていた尿酸塩結晶の縮小が確認できた。その後2回、計4回USを実施、当院治療開始から51ヶ月後の4回目のUSでは初回US実施時に認めていた両母趾の尿酸塩結晶が明らかに縮小したのを認めた。

症例 2

47歳男性。以前から高尿酸血症を指摘されており左母趾発作出現し当院受診。当院治療開始から29ヶ月後にUSを実施し、左母趾に尿酸塩結晶を認めた。その後2回US実施とともに尿酸塩結晶の縮小を認めた。

症例 3

55歳男性。左母趾発作出現し、当院受診。当院で治療開始から70ヶ月後にUS実施し、両母趾に尿酸塩結晶沈着を認めた。その後、26ヶ月後

に再度USにて評価したところ、左母趾に認めていた尿酸塩結晶の縮小を認めた。

結 語

USは関節内の尿酸塩結晶沈着を診断可能であり、経時的に結晶沈着を観察することによる治療効果判定に加えアドヒアランスの向上にも有用であると考えられた。

1) 両国東口クリニック

2) つばさクリニック

3) 帝京大学医学部附属新宿クリニック

Ryoko Sasaki, Hiroshi Ooyama, Hitoshi Moromizato

Keiko Ooyama

Shin Fujimori